

高2 東大 国語



# 1章

## 【問題】(演習)

出典：湯川秀樹『湯川秀樹著作集5』／東北大学 97年

### 文章略解

「科学は人間の役に立つものだ」と多くの人たちは永い間信じてきた。十九世紀までは、人間が自然力を統御することができていたため、このような楽観視が可能だった。しかし現在ではこの自然力が人間の能力を超えて巨大化しつつあり、人類の破滅を招きかねない状況になっている。これは普遍性を旨とする科学が拡大してきた「行きがかり」に関わるものでもあるが、この「行きがかり」を止めるべく努力するのが人類の今後の課題であろう。

### 解答

問1 人間・自然

問2 ①Ⅱ(エ) ②Ⅱ捨てる(やめる)

問3 ①Ⅱ人間が科学で自然力を制御でき、人類の幸福を楽観できた事態。(29字・解答例)

②Ⅱ人間の行使する自然力が人間の意図を超えて巨大化し、人類の破滅が予想される事態。(39字・解答例)

問4 科学が人間の知恵の有機的な一環であり、万人を幸福にする普遍的な共有財産として蓄積されてきたこと。(48字・解答例)

出典：田中美知太郎『ソフィスト』「九、悪名の由来」／ 青山学院大学 法学部 85年

文章略解

古代ギリシアのソフィストであるアンティポンは、その著『真理』の中で、人が見ているときには人々の「思いなし」である国の法律・習慣を順守し、人が見えていない時は、「真実」を表す自然の本性に従って行動するのが、正しくて道理に適った生き方であると述べている。一方、ソクラテスは、人間は、誰かが見えている見えていないに関わらず、なお正しい行ないを目指すべきであり、それこそが哲学者の求める真実の正義なのであると考えていた。しかし、その時代、ソクラテスはソピステースと同一視されていた。

解答

- 問1 ① 敬 ② 制裁 ③ 根拠

問2 いまい

- 問3 (1) ア (2) イ

問4 しかしひと (11行目)

- 問5 (1) 真実の正義 (13行目)  
(2) ウ

問6 ウ

問3 傍線部の内容説明問題。傍線部(1)・(2)は、「(1)と(2)という『対立概念』と表現されているところから、傍線部(1)・(2)は、対立するものとわかる。そこで、先のアンティポンの言葉の中から、対立する概念を探す。すると、4行目に、「法律は後から勝手に定められたものであるが、自然のそれは必然的」とあり、ここから、「法律」↑↓「自然のそれ」という構造が見える。

そして、この後の部分を見ると、「自然のそれ」は、「自然の本性にもとづいて生じたところのもの」(6行目)と言い換えられ、さらに、「真実に生ずる」(8行目)と言い換えられている。つまり、「自然のそれ」＝「自然の本性」＝「真実」＝傍線部(2)なのである。よって、傍線部(2)＝(イ)。

傍線部(2)が「自然のそれ」なのだから、これの対立概念となる傍線部(1)は、「法律」である。8行目の「人々の思いなし(ドクサ)によって生ずる」ことが「真実に生ずる」ことと対比されていることにも着眼。つまり、傍線部(1)＝「思いなし」＝「法律」なのである。この「法律」は、アンティポンの言葉の冒頭で「自分の住む国の習慣や法律」と書かれている。したがって、傍線部(1)＝(ア)となる。

問4 文脈を説明する問題。傍線部(3)の内容は、直後の「くのは」に続く、「このような正義の問題」である。そこで、「このような」の指示部分を示せばよいとわかる。文脈を前にたどると、この「このような正義」は、傍線部(3)の前でも、「このような正義……真実の正義」と出てくる。そこで、さらにこの前を見ると、「しかしひとくであるうか」と疑問が提示されている。つまり、「このような正義」とは、ひとが「法律の強制や社会の制裁を離れて、だれも見入る人がなくても、なお正しい行ないをする」という正義だとわかる。よって、この問いの部分が解答になる。

#### 問5 傍線部の内容説明問題。

(1)について。傍線部(4)には、「このような」という指示語が付けられているところから、この指示内容を探せばよい。傍線部(4)を含む一文で「……を発見した者がソクラテスなのであった。」と説明されていることに着目。

本文で筆者は、数名の哲学者の言葉をとりあげ、その主張を説明しているが、それらの関係が読み取れただろうか。まず、アンティポンについては、「国家の定める法律や道徳の限界を明確にしている」としている(10行目)。その後、プラトンについては、

「問おうとしたのは、このような正義の問題だったのである」と言っている(14～15行目)。この「このような正義」とは、問4のところ解説したように、「しかしひとは……なお正しい行ないをする」という正義であり、「真実の正義」のことである。この後、筆者は、アリストIPPポスをとりあげ、これについて、「これも、哲学者の生活が国家社会の法律や道徳よりも、もっと深いところに根柢をもつものであることを語った」とまとめている。ここに「これも」とあり、これに続いて「このような真の道徳を発見した者がソクラテス」とあることに着眼しよう。

つまり、筆者は、プラトンは「真実の正義」を問おうとしたと言い、アリストIPPポスも同様の主張をしていると述べ、ソクラテスが「このような真の道徳」を発見したと主張しているのである。したがって、「真の道徳」＝「真実の正義」と考えられよう。

(2)について。「真の道徳」＝「真実の正義」＝「哲学者の生活(アリストIPPポスの主張)」だから、これらに共通するものを考えればよい。「哲学者の生活」は、「国家社会の法律や道徳よりも、もっと深いところに根柢をもつ」とあるので、「法律や道徳」の範疇に入るものを選択肢から外す。すると、「現世的」とする(ア)、「社会正義に立脚」の(イ)は外れる。そして「哲学者」とは「法律が廃止されても、今と同じ生き方をしていく」のだから、「自己を発展させて行く」とある(オ)も外れるだろう。また、(エ)の「生活欲」は、「真の道徳」「真実の正義」「哲学者の生活」のいずれともまったくの無関係である。すると(ウ)が残るが、「現世の動向に左右されない」という部分が、「真実の正義」についての「だれも見入る人がなくても、なお正しい行ないをする」という説明から外れていないので、これを解答とする。

## 問6

本文の趣旨説明問題。選択肢は、アンティポーンとソクラテスの考え方がきちんと把握されているか、というところを見ているので、まず、両者の考え方の本文での違いを中心に整理する。

アンティポーンに付けられた下注から、アンティポーンはソピステースであることがわかる。

また、アンティポーンは、「正當なというのはいくらか違反しないということ」と述べている。そして、そのために「証人となる者のうやまうがよい」と言っている。ここから、

・アンティポーンの正義とは、自分の住む国の習慣や法律に違反しないことが大事であり、国家の枠を外れた考え方は持っていない。これに対して、ソクラテスの「正しい行ない」は、「国家社会の法律や根柢をもつもの」であり、

・ソクラテスの正義とは、国家の枠を見ない、もっと広く、人間としての正義を中心に考えたものとなる。以上のことをふまえて、選択肢にあたる。

(ア)について。本文で、アンティポーンが述べているのは、国家の中で社会的制裁を受けずに済む方法なので、「人間の我欲」云々は、不適当。

(イ)について。先に示した通り、アンティポーンとソクラテスは同じ考えを持っていないので、「ソクラテスと変るところはない」は×。

(ウ)は、問5の(1)から、「仮象的な正義」＝「国家」で、また、アンティポーンが「国家」の枠から逃れられていないところから、本文の趣旨と合致する。

ついでに(エ)を見ると、「仮象」＝「国家」であり、「正義」＝「真実の正義」なので、アンティポーンの考え方に反する。よって、不適当。

●  
×  
モ  
●

## 【添削課題】

出典…小林秀樹『「じぶん探し」について考える』／千葉大学 07年

## 文章略解

「じぶん探し」において問われている「私」とは、記憶の連続性や感覚の固有性などといった内的自覚の一貫性・不可疑性によって実感される「私」ではなく、また、ありもしない幻影としての「理想の私」でもない、他者との関係性のうちにあるが、他者ではない独自の存在である。したがって「じぶん探し」という問いは「じぶん」や「ほんとうの私」自体を探求する問いに見えるが、実は「私」の存立を基礎づけている他者との関係性と、その関係性によって規定される「私」のあり方が問い直されているのである。

## 解答

問1 ①Ⅱ焦燥(躁) ②Ⅱ幻影 ③Ⅲ終結 ④Ⅱ反復 ⑤Ⅱ規定

問2 IⅡ絶対化 IIⅡ不可疑性(20行目)

問3 疑いようのない一貫した記憶の連続性や感覚の固有性により、自己の存在を同定する実感。(41字・解答例)

問4 「私」とは内的自覚の不可疑性によって同定された自己でもなく、また現実から乖離した理想としての自己でもない、他者との関係性のうちに見出される独自の存在であり、「じぶん探し」で探求すべきものは他者との関係性とそれによって規定される自らのあり方であると考えている。(129字・解答例)



特別問題

例) 理想的な自己を真の自己であると錯覚し、現実から乖離した仮構にすぎない自己の理想像を探求するというもの。〔51字・解答〕

出典：加藤周一『言葉と人間』より「狂気のなかの正気または『リヤ王』の事」／神戸大学 87年

文章略解

十六世紀末十七世紀初めのイギリスの役者シェイクスピア。彼の創作した有名な戯曲の一つ『リヤ王』にはさまざまな解釈が可能だが、その一つは、主人公リヤ王の変身の物語とする見方である。まずは愚行を演じる行動の人から始まり、続いて忘恩に激怒する激情の人となる。やがて王という社会的役割から追放されるに及び、ほとんど狂気でありながら、同時に権力と社会の鋭い観察者、ひいては歴史家に近い存在となる。認識の主体は同時に行動の主体ではあり得ないのか？ という疑問の提示が意図されていたのかもしれない。

解答

問1 ① ㊦ 奔流 ② ㊤ 美服 ③ ㊢ 摘発 ④ ㊣ 虜囚 ⑤ ㊡ 消長

問2 A ㊦ (ウ) B ㊤ (エ) C ㊢ (ア) D ㊣ (イ) E ㊡ (オ)

問3 主人公リヤ王の愚行

問4 (a) ㊦ 無力であり (15行目)

(b) ㊦ 富であった(ということ) (9行目)

問5 歴史と社会の観察者(権力と社会の鋭い観察者)になったこと。

問6 愚考する行動の人から、怒り狂う激情の人へ。さらには無力で絶望しほとんど狂気でありながら、権力と社会の鋭い観察者となり歴史家に近い存在に至る。〔70字・解答例〕

解説

問1 漢字の問題は、同音異義語が関わってくるから気をつけよう。①「本流」、②「微服」、⑤「象徴」「省庁」などと間違えないように。

問2 Aについて。まず第一に、「愚行」を述べる段落から「激情」を述べる段落へと転換する部分であること。さらに、「領国の半分を得た(王からもらった)『それなのに』身を寄せた王を手ひどく扱う。」という文脈であることを考慮する。ふつう領国の半分を王からもらったら、王に感謝して(ましてや実の娘なのだ!)手厚く扱うだろう。ところが現実には逆なのだから、逆接系の語を選ぶ。

Bについて。空欄Bに続く「芝居のリヤ王は、まず行動の人としてあらわれ」は、第二段落を受けての繰り返し(特に「主人公の愚行から話がはじまる。」という叙述に注目しよう)。さらに「次に激情の人としてあらわれる。」は第三段落を受けての繰り返し(特に「リヤ王は、激怒し、激怒は……」という叙述に注目しよう)。すなわち、前の二つの段落の内容を端的にまとめた形で繰り返し返そうとしている。繰り返しを導く語を、選択肢の中から探す。

Cについて。続く一文中の「狂気のなかの正気」がヒント。空欄Cの前の「狂気の状態」と、後の「権力と社会の鋭い観察者(理解者)」「(正気)が同時に両立している。

Dについて。「権力と社会の鋭い観察者(理解者)」となった結果、「リヤ王は、何をいうだろうか。」という文脈。その後「たとえは」と続くから、この空欄Dでは「たとえは」は使えない。因果関係の形式を借りつつ、例を導いている。

Eについて。空欄E直後の部分は、直前の「汚職は大きければ大きいほどテキハツされ難いという今日の事情」の具体例である。具体例を導くための語を、選択肢の中から探す。

問3 「聰明になるまでは老いるべきでなかった」ということは、「愚かなまま年老いてしまった」ということ。この道化師の言葉は、

その前、「老いたリヤ王……すなわち主人公の愚行」という部分に対応し、この部分を立証する証言の形で提出されている。

問4 (a)について。「行動」という語に注目する。これは、第四段落第一文に出てくる(「……リヤ王は、まず行動の人としてあらわれ、

次に激情の人としてあらわれる。」。さらに見ていくと、「ところが」という語によって対立関係が作られ「……王は、全く無力であり、絶望し(すなわち激情さえもおこらず)……」と続く。「行動の人」と「無力であり」の部分が対応し、「激情の人」と「絶望し(すなわち激情さえもおこらず)」の部分とが対応する。と見てくると、前者の方に、後者の「(すなわち激情さえもおこらず)」に当たる表現がない。対句のような関係でとらえたいわけで、該当する叙述の欲しいところ。と、ここで挿入文をふりかえると、括弧で括られている点、「すなわち」や「行動」の語がある点、「失い」と否定で締めくくられている点など、ぴったり該当している。

(b)について。まず挿入文を見る。「日本語にくらべれば」とあるから、日本語以外の外国語が問題にされている箇所と、見当がつく。これは、第三段落の余談のような(?)箇所しかない。ここを探すと、「英語には、悪口のための語彙が実に豊富であったということ、」という部分が見えてくる。「日本語にくらべれば」が「英語には」の部分と対応し、「豊富」の語句が双方にあり、「今でも……である」と「であった」という過去形の言い方が対応する。

問5 傍線部(3)直後の一文が最大の根拠。「歴史と社会の観察者は、歴史への参画と社会的行動の終わった後に成立する。」とある。

「歴史と社会の観察者」が「正気」の状態に対応し、「歴史への参画と社会的行動の終わった後」が、「狂気」の状態に対応する。

また、第四段落末にも「狂気の中の正気」という表現があり、これはその前の「ほとんど狂気の状態となる。……権力と社会の鋭い観察者(理解者)となる。」を受ける。「正気」は「権力と社会の鋭い観察者(理解者)」に対応する。

問6 第四段落が最大のポイント。第二段落を受けて「まず行動の人としてあらわれ」と述べられ、第三段落を受けて「次に激情の人

としてあらわれる」と述べられる。さらに、「第三段階に至ると、……ほとんど狂気の状態となる。……権力と社会の鋭い観察者(理解者)となる。」と続く。リヤ王の変身を実際にたどる作業は、第五段落「この時のリヤ王は、ほとんど歴史家に近い。」で締

めくくられる。

「リヤ王は、……」や「王は、……」という表現を手掛かりに、その近辺から材料を拾って考えていくのが、コツ。

出典：『徒然草』 第百九十段 / オリジナル問題

## 現代語訳

妻というものこそは、男が持つてはならないものである。「あの人は、妻がなく」いつでも独り暮らしで」などと聞くのは、奥ゆかしく感じるけれども、「誰その婿になってしまった」とも、あるいはまた、「これこれという女を家につれこんで、同居している」などと聞いてしまうと、ひどく見下げる気持ちに自然となるものである。そして、「格別なこともない女をすばらしいと思ひ込んで連れ添っているであろう」と、かりそめにも推測されてくるし、「その妻が」立派な女ならば、「妻をかわいがって、自分の守り本尊のよう大切にしているであろう。いってみれば、その程度なのだろう」ときつと思われるに違いない。まして、家庭内のことをきりまわして処理している女は、実にくだらない。(夫との間に)子どもなんかできて、大事に世話してかわいがっているのは、いやなものだ。相手の男が亡くなった後に、尼となって年をとっている様子は、夫が死んだ後までも見苦しい。

どのような女であっても、朝晩一緒にいて顔を合わせているのでは、ひどく気に入らなくなり、いやになるであろう。(それでは)女自身にとっても、(夫に嫌われるし、別れ去ることもできずで)どちらにもつくことのできない状態になるであろう。そこで、(男が)よそに住んでいて、時々(女のもとへ)通って行って泊まるというのが、長い年月を経過しても切れない男女の仲ともなるものであろう。(男が)不意にやって来て、そのまま女のもとに宿泊などをするのは、きつと、(女には)新鮮な感じがするにちがいない。

問 1 (a) 妻 (b) 殊 (c) 居

問 2 ① (イ) ② (ウ) ③ (エ)

問 3 (1) 男が持つてはならないものである

(2) 奥ゆかしく感じるけれども

(5) いやなものだ

(6) 気に入らなくなり

問 4 (3) 男は、(そのような妻を) かわいがって

(8) 男が(女のもとへ) 突然やって来て

問 5 ① 入るところ ② 「こそ」と「と」の間。 / 相当する語句 ③ あらめ

② (妻がよい女でも) 男は女を自分の仏のように大切にしている程度のものなのだろうときっと思われるに違いない [解答例]

問 6 理由 ① 男女が一日中一緒にいれば、互いにしっくりいなくなり、憎らしくなるから。

解決策 ② 男女が別々に住んで、男の方が女のもとへ時々通うこと。 [いずれも解答例]

出典：『徒然草』第五十段 / オリジナル問題

## 現代語訳

応長年間ごろのこと、伊勢国から女で鬼になった者を引き連れて上京してきたという事件があって、そのころ二十日ばかりの間、毎日、京都や白川の人々が、鬼を見るためにといってむやみに外を出歩く。(そして口々に)「昨日は西園寺に(鬼が)参上した(そうですな)」「今日は上皇様の御所へ参上するにちがいない」「ちようど今は、どこそこに(いるそうですよ)」などと言い合っている。(しかし)はつきりと(自分の目で)見たという人もいないし、(全くの)うそだという人もいない。高貴な人も下賤の者も、ただ鬼のこゝろばかりを噂してやまない。

ちようどその頃、(私が)東山から安居院のあたりへ出かけました時に、四条通りから北にかけてのあたりの人々が、皆、北の方角へ向かって走っていく。(そして)「一条室町に鬼がいるぞ」と大声で口々に騒ぎたてている。(そこで)今出川のあたりから見渡すと、上皇の(賀茂祭見物のため常設されていた)棧敷席のあるあたりは、全く通り抜けることができそうもないほど、(人が)立て込んでいる。もともと根拠のないことではないようだ(私は)思つて、家人を行かせて(様子を)見せたのであるが、全く(鬼に)会つた者がいない。日が暮れるまで(人々は)こうして騒いで、しまいには喧嘩がおきて、あきれするような様々なことがあつたのだつた。

その当時、(世間では)広く、二三日、人々が病氣にかかることがございましたが、(そのことをとり上げて)あの、鬼についての流言飛語は、この病気の流行する前兆を示すものであつたのだと言ふ人もございました。



問1 a 連れて／引き連れて

b むやみに〔Ⅱやたらに〕外を出歩く

c 高貴な人も下賤の者も

d 口々に騒ぎ立てている

e あきれる〔Ⅱ驚く〕ような様々なこと

問2 (1) ちょうど今は、鬼はどこそこにいる（ようだ）

(2) 私は（が）出かけました時に

問3 世の中が鬼の女の噂で持ち切りの頃、筆者も鬼見物の群集を目の当たりにしたので事実を確かめたいと思ったから。〔52字・解答例〕

問4 口語訳／全く鬼に会った者がいない

主題／人間は群集の状態に置かれると、不合理で衝動的な言動にまきこまれやすいものだということ。〔43字・解答例〕

問5 疫病の流行する前兆。〔10字・解答例〕

## 問1 単語ではなく、語句の意味を問う問題。

こうした問題ではまず、品詞分解し、語句の構成を明らかにしよう。次いで文全体の中で語句がどういう位置を占めるのか観察し、出題者の意図をつかもう。さらに、できれば文と文の論理的関係にも配慮して、必要な場合は語句を補って現代語訳として整えよう。いつてみれば、ミクロ的視点からマクロ的視点へと転換してゆくわけである。人によっては、あるいは逆のやりかた（マクロからミクロへ）が自然だという人がいるかもしれないが、はじめから全体の意味の流れがつかめる人は少数であろうし、そういう人にありがちなのが細部への心配りの欠如なので、ミクロからマクロへの流れ——品詞分解、文の成分としての働き、文脈をとらえた解釈という展開——がぞましい。

**a** 「あて」：ワ行上一段動詞「ある（率る）」の連用形＋接続助詞「て」。主語（動作主体）は明示されていないが、直前に対象を示す「女の鬼に成りたるを」があることから、「居て」の意ではないことが明らかである。出題者の狙いも「居る」と「率る」の読み分けにあることは明らか。

**b** 「出で惑ふ」：夕行下二段動詞「出づ」の連用形とハ行四段動詞「惑ふ」が連続したものの。「出でて惑ふ」ではないので、「出づ」と「惑ふ」それぞれが個別の動詞なのか、複合動詞なのか、それとも個別の動詞ではあっても本動詞「出づ」＋補助動詞「惑ふ」なのかを考えること。この「出で惑ふ」は、文中では述語の位置にあり、主語「京・白川の人（が）」と呼応している。「鬼見に」は「ゝのために」という目的をあらわす。そこで「出で惑ふ」の「出づ」が述部の意味の中心であると判断できる。補助動詞「惑ふ」は本動詞の連用形に付いて「むやみに」（する）「ひたすら」（する）「ひどく」（する）というふうの意味を加えることばである。

**c** 「上下」：「じょうげ」と読む。字音語である。「上」と「下」はもともと「身分の高い人」と「下賤な者」をさしたが、ここでは転じて「あらゆる身分の人々（が）」の意。文中で主語に相当する位置にあることから理解できよう。

**d** 「ののしり合へり」：ラ行四段動詞「ののしる」の連用形とハ行四段動詞「合ふ」の已然形（命令形）と、さらに助動詞・存続である。「り」の終止形とから成る。**b** の「惑ふ」の場合と同様の考え方ができる。「ののしりて合へり」ではないので「合ふ」は補助動詞である。本動詞の連用形に付いて「一緒に」（する）「互いに」（する）の意を、直前の本動詞に添える。「ののしる」は、大きな声や音をたてる意。古語の「騒ぐ」のように、自然現象についても用いられる語と異なって用法が狭く、人間や動物などに

ついてしか用いない。「四条よりかみさまの人」を主部として呼応する述部（述語文節）である。

e 「あさましきことども」…活用形容詞「あさまし」の連体形と形式名詞「こと」に複数をあらわす接尾語「〜ども」が付いたもの。「あさまし」は、平安時代に「びつくりする・あきれ返る」という意味の四段活用動詞「あさむ」からできた形容詞。もともと善・悪いずれの意味でも用いられていたが、しだいに否定的な意味に限られるようになっていった。現代語の「あさましい」（心が汚く卑しい・がつがつしている）は、このことばが残ったものである。文の成分としては、直後の述部「ありけり」と呼応する主部である。筆者もここでは否定的な意味で用いていることが文脈から明らかに見てとれる。直前の「鬪諍」とは、戦い争うこと、鬪争、喧嘩といった意味。兼好は貴族的な人間なので殊にこうした暴力などは忌み嫌ったにちがいない。

## 問2 省略されている語句を補って口語訳する問題。

省略されているとはどういうことだろうか？ まず、この点が出発点だ。省略とは、本来あるはずの部分がなから、本来の姿とは何かがわからなければならない。文の本来の姿とは、主語・述語・目的語などがそろった姿のことである。ならば、問1のように、品詞分解をして、文の成分としての働きを考え、文と文のつながり（文脈）をとらえていくというやりかたで解いてゆけるはずである。

(1) 「ただ今（名詞）は（助詞）そこそこ（代名詞）に（助詞）。文が助詞（終助詞ではない）で中断されたように終っている。この最後の「に」は、体言（代名詞）についているから格助詞で、本動詞が省略されていることは明らかである。文脈を見ると「昨日は西園寺に参りたりし」「今日は院へ参るべし」とあるから、ひき続いて「ただ今（現在）は、そこそこ（どこそこ）に（いる）」となるであろう。「いるらしい」でも「いるようだ（ようだ）」でもかまわない。本動詞の省略がつかめていることが肝心なのだ。さらに、「いる」を述語と考えれば主語が必要になる。そこで「鬼は」を補って完成する。

(2) 「罷り（動詞・ラ行四段・連用形）」「侍り（補助動詞・ラ行変格活用・連用形）」「し（助動詞・直接体験の過去・連体形）」「に（助詞）。文はいったん終ったようにみえて「に」で次へ続く形となっている。傍線部の直前には「安居院辺へ」という場所を示す語と格助詞がある。さらに文頭には「その頃」と時を示す語句がみえる。そう、この傍線部には主語（動作主体）が必要なのだ。「侍りし」は、「〜でした」「〜ました」という現代語の丁寧表現に相当する文末表現である。文末の直接体験の過去から、動作主体は筆者兼好自身であることがわかる。筆者が自分の行動を読者に説明しているのである。そこで「私（兼好）は」を傍線部の直

前に補い、文の形を整える。「罷る」は、「東山より安居院辺へ」と直結する本動詞なので「行く」「出かける」といった訳が浮かぶ。この場合「罷る」は通常の謙讓語ではなく話し手（書き手）が、自身をへりくだって表現する敬語なのである。「へりくだる」とは、話者の聞き手に対する改まった意識、他をうやまい、自身を卑下するような感覚のことである。訳すと丁寧語のようにになるので、辞書によつては、丁寧語と書いているものもある。しかし、丁寧語が二つ重なるのは奇妙なので、やはり特殊な謙讓語と考えたほうがよい。中世には広く使われた敬語表現の一つなので覚えておいてもらいたい。さて、ここまでを総合すると、「私が（は）出かけました」となるものの、「に」の訳しかたが決まらない。「に」を格助詞だと考えるなら、直前に「時」を補えばすつきりする。接続助詞だと考えるなら、「〜（た）のですが」「〜が」で、訳として問題ない。これは、「に」を格助詞・接続助詞いずれとしても解釈し得るといふことなので、どちらが正しいといふことはできない場合なのだ。つまり、どちらでもよいのである。

### 問3

傍線部の理由を説明するには、まず傍線部の内容を明確にしなければならない。次に正確に解釈された傍線部を軸に、その理由に相当する部分を本文中から特定し、論理として構成する。多くの場合、理由にあたる部分が本文中にそのまま見つかるが、抜き出しでもないし字数の制約もあるので、自分の部分的要約をすることになる。

この設問の場合はどうか。傍線部「人／を／遣り／て／見する」のうち、「人」は筆者の家の者、召使い、家人と考えられる。「遣る」はラ行四段動詞で（人を）行かせる、遣わすの意。「見する」は、サ行下二段動詞「見す」の連体形で、見せるの意。言葉を補えば傍線部は「私（＝筆者）は、家人を行かせて（鬼を）見せようとした」のようになるだろう。筆者のこうした行動の理由を示している表現が傍線部の直前「とて」である。「とて」は格助詞「と」＋接続助詞「て」が一語化したもの。一般には一語で格助詞と考えるが、連語と説明する辞書もある。「〜と違って」「〜と言って」「〜ということ」のように、ある言葉や内容を引用することばである。本文の段落でいえば第二段落の冒頭、「その頃、東山より安居院辺へ罷り侍りに、」からの内容がすべて傍線部の理由とみてよいだろう。「とて」の直前にある「めり」も、視覚に基づく推定「〜のように見える（思える）」だから筆者の行動の理由をよく示している。そこで「その頃〜あらざめり」までを要約し、筆者の立場に即した表現に改めれば完成する。

問4 傍線部訳および本文の主題を問う問題。

傍線部訳のために品詞分解をしよう。「おほかた（副詞）／逢へ（動詞・ハ行四段・已然形）／る（助動詞・完了・連体形）／者（名詞）／なし（形容詞）」この「おほかた」は、世間一般に広く通用するといった意味ではなく、打消の語と呼応して「全然」（ない）「まったく」（ない）の意味をあらわす。そこで言葉を補って訳せば「全く（鬼に）会った（という）者がいない」となる。さて、本文の主題は何か。本文は「女の鬼に成りたるをゐて上りたり」にはじまり「かの、鬼の虚言」で終わる。世の中を騒然とさせた鬼の噂は、単なる流言<sup>デマ</sup>だったのである。それにしても、何故？ であろう。主題というより話題なら、「鬼の流言の話」ということになり、誰でも思いつく。しかし、ここは「主題」なので、読みに基づいて掘り下げなくてはならない。筆者兼好が見ているのは、鬼の噂という現象の奥にある人間の本质である。第一段落にある「上下」（高貴な人も下賤の者も）のように、身分に関係なく、第二段落にあるように、筆者兼好自身も噂に巻き込まれてしまう。人間は群集の状態に置かれると自己や主体性をあつけなく喪失してしまう非常に不安定な存在なのではないか、兼好が本文全体からこうしたこと伝えてるように読めるのではないだろうか。

問5 指示語を含む語句の内容説明問題。

このタイプの問題も傍線部訳の問題と同様、品詞分解からはじめよう。「こ（代名詞）／の（助詞）／しるし（名詞）」。「しるし」とは、物事を象徴する出来事（もの）のことで、文の意味から「かの、鬼の虚言」Ⅱ「この（しるし）」ということになる。「しるし」には、徴・験・印・標・証などさまざまな漢字に置きかえられることばがあるが、ここは「徴」が最も近いだろう。「徴」とは、前兆とか兆<sup>きざし</sup>しとかいった意味で、「かの、鬼の虚言」は前兆だったのだ、と言う人もいたと言っているわけである。何の前兆かといえは、指示語の指す範囲は「その頃、おしなべて、二三日、人のわづらふ事待りし」ということになり、この部分を要約すれば「疫病の流行」といった簡潔なことばで表現できよう。つまり、「疫病の流行する前兆」といえば、このしるしの明確な内容説明になる。

## 4章

### 【問題】(演習)

出典：『大和物語』 第一五六段 / 筑波大学 89年

#### 現代語訳

信濃の国にある更級という所に男が住んでいた。(その男は)若い時に親が死んだので、おばが親のように若い頃からいっしょに暮らしていたが、この(男の)妻の性質は、たいそう薄情な点が多くて、この姑が年老いて腰が曲がっているのをいつも憎らしく思い続けて、男にも、このおばのお心が意地悪でひどいということを言い聞かせたので、(男の態度も)以前のようにではなく、このおばに對しておろそかに扱うことが多くなっていた。このおばは大層ひどく年老いて、腰は二つに折れ曲がっていた。このことをさらに、この嫁は邪魔でわずらわしいと思って、今までよくも死なないでいることよと思って、おばの悪口を言っでは、「おばさんを」連れてお行きになって山奥にお捨てになってしまってください」としきりに責めたので、(男も)責められて閉口し、そうしてしまおうと思うようになった。

月のたいそう明るい夜に、「おばあさん、さあいらっしやい。寺でありがたい法会をするそうので、それをお見せしましょう」と言ったので、(おばは)この上なく喜んで男の背に負われてしまった。(男は)高い山の麓に住んでいたもので、その山の奥にずっと入って行って、高い山の頂でおばが降りてこれそれでもない所に(おばを)置いて逃げてきてしまった。(おばが)「これ、これ」と言ったけれども、(男は)返事もしないで逃げて家に帰ってきて考えているうちに、妻が告げ口をして自分を怒らせたときは腹を立ててこんなふうにしてしまったが、長い年月親のように自分を養育して共に暮らしてきたので、たいそう悲しく思われたのだった。この山の上から月も実にこの上なく明るく上ったのを物思いにふけてじっと見ていると、一晚じゅう一睡もできず、悲しく思われたので、このように詠んだ(歌は)、

我が心……私は自分の心を慰めきれないでいる、この更級の、おばを捨ててきた山に照る月を見ていると

と詠んで、ふたたび山に行つて（おばを）迎えて連れもどつてきたのだった。それから以後この山を姥捨山と呼ぶようになった。「姥捨山」と言えは「なぐさめがたし」という思いを乗せる慣習となつたのは、このような由来であるとのことだ。

**解答**

問1 (a) 〓く (b) 〓き (c) 〓き

問2 (1) 〓粗略に扱ふこと

(2) 〓邪魔でわずらわしいと思つて

(3) 〓お捨てになつてしまつてください

問3 おばを山奥に捨ててしまおう

問4 妻がおばの悪口を言つて男を怒らせたときは男もつい腹を立てておばを高い山の頂に置いてきてしまつたけれども〔解答例〕

問5 長年自分を育ててくれたおばを山に置き去りにしてきたことを思い悩み、何とか気を紛らわそうと思つても、おばを捨ててきた

山に上る月を見ると、罪悪感にさいなまれてどうにも自分の気持ちを晴らすことができないという男の心情。〔解答例〕

## 現代語訳

あまの河……(織姫に会おうと) 天の川の浅瀬(を探るために、浅瀬の水面に立つ) 白波を(まごつきながら) 探し探しては(なんとか川を渡ろうとしたのだが、川の深さに浅瀬が見つからずに) 渡りきれないので、(そのうちに白々と) 夜が明けてしまつたことだ(、悲しいかな、今年は織姫との逢瀬も叶わずじまいになってしまふのか) 『古今和歌集』「秋上」紀友則)

この歌の意味は、天の川の深さ(のため)に、浅瀬(に立つ) 白波を探り当て(ようと)して、川の(こちら) 岸に立って(まだ渡れずに) いるうちに、(いつのまにか夜が) 明けてしまったので、「今となっては、もうどうしようもない」と(思つて)、(織姫に) 逢わないで帰ってしまった(というもの) である。(だが本当に) そんなことがあるはずがあるだろうか(、あるはずがないのだ)。普通の人でさえ、一年間を(通して) 夜も昼も(女のことを) 恋しく思つて過(こ)していて、珍しいことに女が逢つてくれることになって夜なのだから、(そうだとすれば) 何としてでも(準備に心を砕いて) 十分に心して(川を) 渡つてゆくだろうに、ましてや(この歌に詠まれているのは) 七夕と(いう、年に一度、日を決めて逢瀬を約束している間柄だと) 申し上げる星座(すなわち天空の神) ではないらっしゃるのではないか。天の川が深いといつて(彦星さまは) お帰りになるはずがない。ましていうまでもなく、その(天の) 川には鵜(う)がいて、(七夕の夜になると集まって橋をつくと決まっているし、それがためでも) 「紅葉を橋として渡し」とも(古歌は) 言(い)、「渡し船の船頭よ、船を早く(向こう岸に) 渡せ」とも言(い)、(また別の古歌では織姫さまの気持ちとして) 「あの方が(川を) 渡つ(てき) たならば、(船頭よ、あの方が帰れないように) きつと楫(かぢ)を隠してしまいなさい」とも詠(よ)んであるのだ。いずれにしても(川を) 渡るような点では(彦星さまにはいくつもの手段があつたことになるから) 支障はあるまい。渡し船の船頭が人を渡す(場合に) は、知(し)っている(人) 知らない(人) によって差別(さべつ)することがあるだろうか(、いやあるはずがない)。(まして年に一度の) 七夕(に逢瀬を持とう) という(、誰もが知(し)っている) 意志(いし)があつて(河を) 渡(わ)らうとして(いるのに、渡し船の船頭がどうして拒否(きよひ)申し上げようか(、断(ことわ)るわけではないのだ)。また、天の川もそれほどまでに深いものだろうか(、それほど深い川ではあるまい)。いずれにしても納(な)得(と)できないことである。(このように、歌の内容と古来の伝説とに整合性がない解釈は問題である。)



それとは別に、誤りを詠んでいるような歌を、『古今（集）』に（凡河内）躬恒や（紀）貫之（など一流の歌人である撰者）がどうして入れようか（、入集させるはずがないだろう）。たとえ、あの（撰者の）人たちが（うっかり）間違つて（入れるには）入れたとしても、（勅撰の命を下した）延喜の聖主（と言われるほどの醍醐帝）が（この歌を）お除きあそばささないことがありえようか（、誤りを詠んだ歌ならきつと削除あそばしたはずである）。（このように、達人が過ちを見逃すはずがないという点でも、右の解釈は問題である。）

（では、なぜ、このような歌が『古今集』に入っているのかというと、それは、）このような（歌の詠み方をする）ことは、古い（時代の）歌の一種の歌体（だから）である。（彦星が織姫を）恋しく思い（逢えないのを）悲しく嘆いて（川岸で）立ったり座ったりして（逢える日をずっと前から）待ったことは一年（もの期間があるの）である。（ところが）稀なことに、待ち遠しい思いをしながら（実際に）逢っていることというのは、たった一晚（だけのこと）である。その（逢える時間の）長さが実に短いので、本当は逢っていたけれども、中途半端（な気持ちのままに逢瀬が終わってしまったよう）であつて、（まるで最初から）逢わなかつたかのように思われるのである。そうであるから、（本来なら、）「逢つていた」時間が短いので逢わなかつた（ような）気持ちができるのだ」と（いう意味を直接的に）詠むはずのところであるが、歌（を作る際）の習慣によつて、そう（いうように、まるで逢わなかつたかのように）詠み、また、（実際には）逢つていても、ひたすらまだ逢っていない様子に詠んであるのである。（別のことに）例えるならば、「月が山の尾根から出て山の尾根に入る」と詠むようなものだ。いったい、いつ月が山（の地中）から出て山に入ることがあるのか（どんな場合でも月が大地・地球から出入りすることはあるまい）。そうであっても、ぱっと見るとそう見えるのを、「その（目で見た）ように（月が山から出入りしたように）見えるのだと思われ」とは表現しないで、ただただ「（月が）山から出た」というように詠むのである。（実際に起こる）現象が食い違うものを、人が何か表現する（場合）は（それと）似ている（だけで実は別々の）ものもまったく同じものと見なし、（実際には自分自身が）聞いていないことも（まるで自分が）聞いているように表現するようである。それ（と同じこと）のように、（はじめに挙げた「あまの河」の）歌も（本当は）逢っていないながらも（歌の中では）逢っていないと表現しているのである。

解答

問 1 4      問 2 5      問 3 3

問 4 3      問 5 2

問 6 一般的には十分に心して川（河）を渡るはずなのに（20字・解答例）

解説

問 1 まず選択肢を分類する。「まで・すら・のみ」は副助詞で、主な意味としては、順に「程度／類推／限定・強調」を表すものである。「こそ」は強意の係助詞、「ゆゑ」は理由を示す形式名詞である。選択肢が助詞系統（形式名詞は助詞ではないが、機能の上から名詞の副助詞的な用法と考えられるので、「助詞系統」と考えて大差あるまい）で占められ、かつ空欄Aは名詞に下接して文節を形成しているので、本問での着眼点は、文構造にあるものと言える。空欄Aに上接する「ただの人」は、傍線部Bの「かまへて渡るらむ」に対応する主語と見て文脈が成り立つ（これで主格文節に接続できない「ゆゑ」は排除される）。さらに、設問部分「ただの人へ渡るらむものを」は、主語と述語があつて、接続助詞の「ものを」を持っていて、接続節になっていることと、被接続部分の冒頭に「まして」という副詞がある点に注意する。ここから、この一文は「……すら、まして……」という《類推文型》であることがつかめるのだ。これに気がつけば、一発で選択肢4の「すら」が指摘できよう。

問 2 《打消推量》の「じ」は助動詞「む」の打消態ではあるが、「む」の意味すべてに対応しているわけではない。この助動詞の意味は、《打消単純推量（～ないだろう）》と《打消単純意志（～しないつもりだ・しないでおう）》の二つしかない。従つて、この助動詞の意味を識別させるとすれば、必然的に二者択一となる。よつて、あらかじめ傍線部Cの「じ」の意味を把握せずとも、選択肢を区別していけば、設問によつて一つだけ異なる意味のものが混じっているとわかっているので、それを指摘すればよいわけである。

選択肢には和歌が並んでいるので、一見難しそうに見えるかもしれないが、助動詞の文法的意味の識別は、和歌の解釈とは別次

元の問題であるから、恐れることはない。傍線部を無視しても解ける問題に、和歌を選択肢に並べているのは、問題を難しそうに見せかけるトリックのようなものだ。本質を見抜けば、この問題の解答法は至って単純である。次のように解けば、端的に解答を導ける。

助動詞が《打消》推量》になるか、《打消》意志》になるかは、主語と述語の関係によるものである。つまり、自称（＝第一人称）の主語を持つ動作に「推量系の助動詞」が使われれば、当然の結果として、この助動詞の意味は《意志》になる。ポイントは、これだけである。これを踏まえて選択肢を見る。

選択肢1……「花の木も今は堀り植ゑじ」は、「木を——植ゑじ」であるから、主語が略されている。よって、和歌読解の暗黙の前提として、主語は自称主語になる。よって、これは、打消意志。なお、「木も」の「も」は係助詞で強調の働きをしており、格助詞とちがつて格を示すわけではない点に注意。

選択肢2……「今宵来む人には逢はじ」で、「人に——逢はじ」であるから、これも主語が略されている。よって、選択肢1に同じである。

選択肢3……「色にはいでじ」で、「色に——いでじ」であるから、これも主語が略されている。よって、選択肢1に同じ。なお、これが「色はいでじ」であった場合は、意味が変わるので要注意。「色には」ならば、これが補語であるから、「私は顔色には出ずまい」という人物の動作を意味する。だが、「色はいでじ」ならば、「色」が主語になるから、これは状態の変化となり、「表情は出ないだろう」という意味になり、「じ」は打消推量になるのだ。「出づ」は一般的には自動詞で、他動詞の場合「出だす」の形が多いが、「出づ」も他動詞としての用法を持つこと（重要）が、この歌からもわかる。

選択肢4……「もみぢ葉に思ひはかけじ」は「もみぢ葉に——思ひを——かけじ」であるから、これも主語が略されている。よって、選択肢1に同じである。なお、「思ひは」の「は」は係助詞で強調の働きをしており、選択肢1の説明と同じく、格助詞とちがつて格を示すわけではない。また「思ひかく（思いを掛ける）」は複合動詞だが、目的語＋動作という構造を持っている。

以上の四つとも《打消意志》であることが確認できた。したがって、残った選択肢5が異質な意味となる。ちなみに、「里はあらじ」で「里——あらじ」と、まさしく「主語——述語」の形を採っている。よって、選択肢5だけが《打消推量》の意味で、これが正解である。

問3 まず傍線部の文節構造から「延喜の聖主」が主語であるのは明白である。(一般に古文の解釈で助詞を補うときは、『格助詞』

「を／の・が」か『係助詞』「は・も」程度しか補えないのであった。)したがって、各選択肢文の中より、これを「醍醐天皇が」としている選択肢1・3・5に絞られる。次に、これら三つの選択肢の文章から共通部分を外していくと、第一の問題点は「のぞかせ給ふ」になる。これが「除く」か「見る」かで、二分されるからだ。この「のぞかせ給ふ」の実質的な動作部分「のぞく」は、傍線部の直前の「(あやまちでも)入れめ」に対応していることから、この対義になりうる「除く」の意味だと判る。よって、選択肢1・3に絞られる。この二つの違いは「はずはなかるう」と「ないことはなかるう」という『当然の否定』か『二重否定の推量』か、になる。ここで、「はずはない」は結果として『否定』、「ないことはない」は結果として『肯定』である点をおさえておく。傍線部は、「ざらむやは」で打消の推量「ざらむ」と反語の複合係助詞「やは」を持つので『打消の反語』であり、そもそも「反語＝否定」であるからこれは二重否定に等しく、肯定表現が真意として出る。ゆえに肯定表現で訳している選択肢3が正解と判る。

問4 指示内容の把握問題では、指示語を含む文節に対して修飾・被修飾関係や主述関係にある文節に着目し、指示内容の話題を想定することから始める。ここでは、傍線部が主語で「古き歌のひとつの姿なり」を述部として、断定文を作っている。つまり、「かやうのこと」＝「古き歌のひとつの姿」という関係を表している。これは、本文中から「古い歌の姿」を説明している部分を求めることを意味するものである。また、一般に指示語は既に述べたこと(またはその時代における常識)を指して使われるのだから、ここまでの流れを確認すると、冒頭に紹介した歌の意味を解釈した後は、一貫してこの歌の内容や扱いに対する疑念を呈し続けている。したがって、傍線部の前は「なぜ『古今集』に〈ひがごと〉を詠んだ歌を入れたのか」という疑問を呈示したものと考えられ、その後に、この断定文が続く点に注目する。ここから、この断定文は、前述の疑問に対する筆者の見解を表した文であると考えられよう。

よって、この傍線部が導く後の部分において、「まことにはくやうにおほゆるなり」「逢ひたれどくさまに詠めるなり」「さにごぞおほゆれく出づるやうに詠むなり」「歌も逢ひながら逢はずとはいふなり」などの類似内容を繰り返し述べている点に着眼できよう。これらに共通するのは「事実通りではなく、歌の趣を優先して虚構を加えること」点だとかめ、これに一致する選択肢を選べば、選択肢3が正解だと判る。

なお、選択肢1は一見よさそうだが、「納得のいかない」云々で選択肢3に一步譲る。選択肢2は「誤って」、選択肢4は「古歌をふまえた」、選択肢5は「事実在即して」がそれぞれ不適である。

なお、結果的にこの文章では指示内容に相当する部分が傍線部の後に示されていることになる。ただしこの場合、傍線部はそれらの部分を直接的に念頭に置いて使われた指示語ではなく、傍線部以前に述べられた事柄を全体として漠然と承ける《状況指示》の指示語である。さらにこれとは別に、古文と現代語とでは指示語の使い方に相違があるため、文章構造だけでなく指示語を用いる意図を捉えないと、指示内容の位置を間違えることもあるので要注意。

#### 問5

知識問題である。僧正遍昭と大伴黒主は、六歌仙の一人である。壬生忠岑は『古今集』撰者の一人で、これが正解。源順は『後撰和歌集』の歌人で、一説には『宇津保物語』の作者だと言われる。藤原公任は、『和漢朗詠集』『新撰髓脳』などの編著者で、平安中期の人。和歌に関する人名などの知識問題としては、勅撰和歌集の「八代集」に関わる「天皇(院)・撰者」をまずおさえておき、さらに「六歌仙」や「藤原公任」、加えて著名な「家集(≡私家集)」とその作者を確認する程度で十分だろう。

#### 問6

口語訳の問題。ポイントは四点。「かまへて」の意味をおさえているか、「らむ」および「ものを」の解釈、客語(≡直接目的語)の補入の四点である。「かまへて」の「かまふ」には「準備する・用意する・配慮する・注意する」などの意味がある。(口語)での「かまわない」というのは、「配慮はいらない」という意味からきている)。この動詞に接続助詞の付いた形「かまへて」は副詞化して、「心して・注意して・十分に」の意味で用いられる。(また、否定文では陳述の副詞として「決して」の意味にもなる。)これは「川を渡る」際のことであり(これでポイントの四点目は把握可能)、「女と逢う」場合に機会を逃さないようにすることなので、ここは「入念な配慮で・細心の注意を払って」のような意味になる。よって、「かまへて渡る」の部分は「細心の注意を払って川を渡る」などと解釈するのが妥当である。次に、「らむ」の解釈にも注意が必要。ここで《現在推量》の「らむ」を使っているのは、主語が「一般的」という性質を持っているためだ。ここでの《現在推量》は、時制としての現在ではなく、《一般的傾向に対する推量》という意識を表し、ほぼ「む」に等しく、「一般的には〜であろう」という意味になるのだ。このニュアンスを含めなくても、さほど失点にはならないだろうが、一応の注意はしておく。「ものを」は本来は体言+格助詞の熟合したもので、一般的には逆接の接続助詞と採る。また、「渡る」の対象が傍線部を含む文中に表現されていないことから、これを補充しなければ

ば減点対象となる。ここでは、傍線部の主語が「ただの人」である点に要注意。これは「一般的な人物」の意味であり、その行為であることから、「渡る」のは「天の川」ではありえない。したがって、訳文を「天の川を渡る」としたら失点になる。一般的に「川を」としなければならぬ。これらのことを踏まえて傍線部を訳すと、「一般的には、細心の注意を払って川を渡るだろうに」と訳される。これでは、文末表現がきこちないので、判りやすく言い換えると、答案は「概して、細心の注意を払って川を渡るはずなのに」のような形になるだろう。



出典：『晏子春秋』 卷五 「内篇雜上」 / 立命館大学 経済学部 85年

## 書き下し文

晏子<sup>あんしせい</sup>齊<sup>し</sup>の相<sup>しやう</sup>と為<sup>な</sup>りて出<sup>い</sup>づ。其<sup>そ</sup>の御<sup>ぎよ</sup>の妻<sup>つま</sup>門<sup>もん</sup>間<sup>かん</sup>より闕<sup>あひら</sup>ふ。其<sup>そ</sup>の夫<sup>おつと</sup>相<sup>しやう</sup>の御<sup>ぎよ</sup>と為<sup>な</sup>り、大<sup>たい</sup>蓋<sup>がい</sup>を擁<sup>よう</sup>し駟<sup>し</sup>馬<sup>ば</sup>に策<sup>さく</sup>ち、意<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>揚<sup>やう</sup>揚<sup>やう</sup>として甚<sup>はな</sup>だ自<sup>じ</sup>得<sup>とく</sup>するなり。既<sup>すで</sup>にして帰<sup>かえ</sup>る。其<sup>そ</sup>の妻<sup>つま</sup>去<sup>さ</sup>らんことを請<sup>こ</sup>ふ。夫<sup>おつと</sup>其<sup>そ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>を問<sup>と</sup>ふ。妻<sup>つま</sup>曰<sup>い</sup>はく、晏<sup>あん</sup>子<sup>し</sup>長<sup>ちやう</sup>六<sup>ろく</sup>尺<sup>しゃく</sup>に満<sup>み</sup>たず、身<sup>み</sup>は齊<sup>せい</sup>国<sup>こく</sup>に相<sup>しやう</sup>となり、名<sup>な</sup>は諸<sup>しよ</sup>侯<sup>こう</sup>に顕<sup>あら</sup>はる。今<sup>いま</sup>者<sup>ま</sup>妾<sup>めかけ</sup>其<sup>い</sup>の出<sup>い</sup>づるを觀<sup>み</sup>るに、志<sup>し</sup>念<sup>ねん</sup>深<sup>か</sup>し。常<sup>つね</sup>に以<sup>もつ</sup>て自<sup>みづか</sup>ら下<sup>くだ</sup>る者<sup>もの</sup>有<sup>あ</sup>り。今<sup>いま</sup>子<sup>し</sup>長<sup>ちやう</sup>八<sup>はち</sup>尺<sup>しゃく</sup>、廼<sup>ひと</sup>ち人<sup>ひと</sup>の僕<sup>ぼく</sup>御<sup>ぎよ</sup>たり。然<sup>しか</sup>れども子<sup>し</sup>の意<sup>い</sup>自<sup>みづか</sup>ら以<sup>もつ</sup>て足<sup>た</sup>ると為<sup>な</sup>す。妾<sup>めかけ</sup>是<sup>こゝ</sup>を以<sup>もつ</sup>て去<sup>さ</sup>るを求<sup>もと</sup>むるなりと。其<sup>そ</sup>の後<sup>のち</sup>夫<sup>おつと</sup>自<sup>みづか</sup>ら抑<sup>おさ</sup>へ損<sup>そん</sup>す。晏<sup>あん</sup>子<sup>し</sup>怪<sup>あやし</sup>みて之<sup>これ</sup>を問<sup>と</sup>へば、御<sup>ぎよ</sup>実<sup>じつ</sup>を以<sup>もつ</sup>て対<sup>たい</sup>ふ。晏<sup>あん</sup>子<sup>し</sup>薦<sup>すす</sup>めて以<sup>もつ</sup>て大<sup>たい</sup>夫<sup>ふ</sup>と為<sup>な</sup>す。

## 現代語訳

晏子は齊の宰相となつて（ある時、用事があつて）外出した。（このとき、晏子の）御者の妻が門のすきまから（夫の様子を）こっそりのぞいて見た。その夫は宰相の御者として、大きなかさを抱え持ち四頭立ての馬にむちを打つて、意気揚々として大変得意そうであつた。しばらくして（夫が）帰つてきた。（そこで、）その妻は、どうか（離縁して）夫の元を去らせてくださいと願ひ出た。夫は、その理由を尋ねた。（すると）妻は言った、「あなたの主人の）晏子は身長が六尺にも足りない小男でありながら、齊国の宰相となつて、その名は諸侯の間に知れわたつています。今、私が晏子の外出するご様子を見ますと、高い志を持っているようです。（それに）いつもへりくだつた態度でいます。あなたは身長が八尺もの大男でありながら、晏子に仕える御者です。しかしあなたの心は（下僕であることに）満足しているようです。私はこういうわけで離縁をお願いしたのです」と。その後、夫は自分をおさえて謙虚にしていた。晏子がそれを不思議に思つて理由を尋ねると、御者はありのままを答えた。（それを聞いた）晏子は、御者を推薦して大夫に取り立て



た。

**解答**

問 1 (a) 〓 しょう (しやう) (b) 〓 ここをもつて (ここをもつて) (c) 〓 こたう (こたふ)

問 2 (ア)

問 3 (ウ)

問 4 みづ (ず) からもつ (つ) てたるとなす / みづ (ず) からもつ (つ) てたれりとなす [別解]

問 5 去 (本文2行目)

問 6 御者が妻に言われた非を認め、改めたから。 [20字・解答例]  
御者が己の欠点を直そうと努める男だから。 [20字・別解例]

## 書き下し文

賈魏公相たるの日、方士有り、姓は許。人に対して未だ嘗て名を称せず、貴賤と無く皆我と称す。時人之を許我と謂ふ。言談頗る採るべき有り。然れども傲誕にして、公卿を視ること蔑如たり。公見んと欲し、人をして邀召せしむること数四なるも、卒に至らず。又た門人をして苦だ之を邀致せしむ。許驢に騎りて徑ちに丞相の庁事に造らんと欲す。門吏之を止めて、可とせず。吏曰はく、「此れ丞相の庁門なり、丞郎と雖も亦た須らく下るべし」と。許曰はく、「我丞相に求むる所無し。丞相我を召して来たらしむ。若し此のごとくんば、但だ須らく我去るべきのみ」と。驢を下らずして去る。門吏急ぎ之を追ふも還らず。以て丞相に白す。魏公又た人をして謝して之を召さしむるも、終に至らず。公嘆じて曰はく、「許は市井の人のみ。惟だ其の人に求むる所無きものすら、尚ほ勢を以て屈すべからず。況んや其の道義を以て自ら任ずる者をや」と。

## 現代語訳

賈魏公が宰相であった頃、許という姓の方士がいた。他人に向かって一度も自分の名前を名乗ったことがなく、身分の上下を問わず、誰に対しても「おれ(我)」と称していた。そこで当時の人々は、かれのことを「許我」と呼んでいた。許の言葉や話には非常に傾聴に値するものがあつた。しかし、勝手気ままな性格で、高位高官の人に向かって馬鹿にするような態度をとつた。賈魏公は一度この許に会いたいと思つて、何度も人を迎えにやつて招いたが、結局やつて来なかつた。さらに食客をやつて根気よく招いた。(すると)許は驢馬に乗つて、まっすぐ宰相の執務する役所に入ろうとした。門番が許を制止して門の中に入れさせなかつた。門番は言つた、「ここは宰相殿の役所の入口である。次官であつても乗り物から下りなければならぬのだ」と。許は言つた、「おれは別に宰相に用事はない。宰相がおれに来いといつたのだ。そう言うのならば、おれは帰るだけだ」と。(そして)驢馬にまたがったまま立ち去つてしまつた。門番は急いで彼を追いかけたが、(許は)戻つて来なかつた。(門番は)このことを宰相に報告した。魏公はまた人をやつて詫びを言わせ、許を招いたが、(許は)とうとうやつて来なかつた。公はため息をついてこう言つた、「許は名もない民間人にすぎない。

だが、彼のように無欲で名利を欲しがらない人間は、やはり力づくで抑えこむことはできない。まして、道義を重んずる人間と自認する人を権勢で支配することなど、全く不可能なことだ」と。

解答

問 1 (ウ)

問 2 (オ)

問 3 (エ)

問 4 (イ)

問 5 (ア)

問 6 (ウ)

解説

問 1 理由説明問題。時人(＝その時代の人)が許を「許我」と呼んだ理由は、直前の一文に書かれている。すなわち、許が「対人未嘗称名、無貴賤皆称我」ということをしていたから、ということになる。この文を現代語訳してみると、「人に対して、今まで一度も自分の名を称したことはなく、「貴賤」(＝身分の上下)に関係なく『我』(＝おれ)と称していた」となる。「貴賤」は、冒頭の「人に対して」から、相手の「貴賤」であり、つまり、許が、相手の身分の上下に関係なく『我』と称していたから、ということになる。これに該当する選択肢はウ。

(ア)は、「名をもたなかった」が不可。本文では「名を称したことがない」と言っているだけである。(イ)・(オ)は、「貴賤」を「出世」と解釈している部分が不可。残りの選択肢のうち、(ウ)は、誰の「身分のちがひ」なのかは本文からは読みとることができない。また、(エ)は許が他の者に対してしたことについて書いてあるが、直前の文には「すすめる」に該当する動詞も、使役の表現もない。

問 2 接続表現と再読文字の知識を問う問題。しかし、話の流れがわかれば簡単に解ける。傍線部(2)の前後の内容から、「下」の意味を限定すれば良い。本文 3・4 行目に「許驕驢」とあり、6 行目に「不下驢而去」とあることから、許はロバに乗って、買

魏公(丞相)の所に来たのである。つまり、ここでは「下」は、「(ロバから)下りる」の意味で使われていることがわかる。「下」の読み方は、まず、「下」(5 行目)、「下」(6 行目)と送りながあつてあることに着目しよう。「下」の方は「べし(須)の二度目の訓」に接続していることから終止形、「下」の方は「ず」(不)の訓)に接続していることから未然形である。つまり、四

段活用をしているから、「くだル」と読むことがわかる。「おル」と読むならば上二段活用ということになる。

さて、選択肢のうち、「下」を「(ロバから)下りる」という意味で解釈しているものは、(オ)だけ。この場合の「下」は自動詞だから、「下ろす」と他動詞で取っている(ウ)・(エ)・(カ)は不可。「須」に使役の意味はない。

「雖」には、「〜けれども」という逆接確定と、「〜だとしても」という逆接仮定の二つの用法がある。ここでは、「雖」の上に主語が置かれていないので、逆接仮定である。「須」……〔終止形〕は、当然の意味を表し、「ぜひ……ねばならない」と訳す。

### 問3

多義語と読み方の知識を問う問題。まず「如レ此」は「如レ此(かくのごとし)」と読む。普通「此」は「これ」「ここ」などと読むが「如レ此」は、慣用的にこう読む。そこで、(ア)「このごとき」(イ)「このごとく」(ウ)「これにしかば」(オ)「これにしかば」はすべて不可だとわかる。残った(エ)と(カ)のうち、(カ)の「わかきこと」は、この場合文脈から「若い」に当たる語句は見つからないので不可。したがって正解は(エ)。

「若」は、大変多くの意味を持つ語である。読み方・意味・品詞をセットで覚えておき、文中での位置を見て、そこに位置することのできる品詞を考え、その品詞の意味を当てはめて前後とつながるかを検討する。

### 問4

主語判定の問題。文脈を追えば難なくわかる。直前の「門吏急追レ之」の「之」は、「不レ下レ驢而去」という行動をとった人物、つまり、ロバを下りずに立ち去っていった「許」と判断できる。「不レ還」とは、「戻って来ない」ということだから、すなわち賈魏公(丞相)の門から立ち去った「許」(＝(イ))が正解。

### 問5

漢字の意味を熟語で問う問題。「謝」には様々な意味があることが、選択肢を見てもわかる。ここでは、賈魏公(丞相)に呼び寄せられた許が、驢を下りると言われて帰ってしまったという状況が前提となっている。そこで魏公すなわち丞相が「使二人謝而召レ之」という行為に出たわけである。「召(呼び寄せる)」対象である「之」は当然許のこと。すると「謝」というのは許に對する行為であり、前提となる状況から考えると、「あやまる」つまり「謝罪」の意味で取るしかない。この意味を持つ熟語は(ア)「陳謝」。「陳」は「述(べる)」という意味で、「謝(罪)」を「陳(べる)」ということ。(イ)「感謝」(オ)「謝恩」(カ)「謝礼」の「謝」は、「礼を言う」、(エ)「謝絶」では「ことわる」、(ウ)「代謝」では「おとろえる」という意味を表す。

## 問6

理由説明問題。理由の根拠は、本文7行目「公嘆曰、」以下の、賈魏公の言葉の中にしかない。まず大まかに捉え、賈魏公は方士である許に対して肯定的な評価をしたのか、否定的な評価をしたのか、を考える。何度も許に会いに来るように言っていることから、肯定的な評価をしていると予想できる。そこで、一文、一語句の意味を丁寧に追っていく。その際、この問題の解答は選択肢から選べばよいのだから、選択肢の内容をその文に代入して意味が通るか考えてみるのがよい。

最初に「許市井人耳」とある。これは「市井人」がポイント。「市井の人」というのは、「街中にいる人」、つまり賈魏公の様に「官」ではなく、「民」のこと。(ア)から(カ)までの選択肢はすべて「民間人」としているから、大事なものは「民間人」の修飾部分の比較ということになる。この「民間人」というのは、当然この話の中心人物である許のことだから、許の人となりに妥当しないものがまず省かれる。すると、(イ)の「知識を求める意欲のない民間人」は、本文とは関係ないので消去できる。

さて、次の公の言葉で、「スラ尚ホ——、況ンヤ……ヲ乎」という語句に着目しよう。これは、「抑揚」の句形である。まず「〜でさえも——である」と、程度の低い(軽い)例をあげておいて、次に「まして……はなおさら(——である)」と、高い(重い)場合を強調する言い方である。このとおり訳してみると、公の言葉は、「人に何かを求めようとするのではないというだけの人でさえも力で押さえつけることはできない。まして(それよりも人格の高尚な)『以道義自任者』はなおさら(力で押さえつけることはできない)。」と言っていることになる。この直訳に最も近いのは(ウ)である。

(ア)は、「道義を信条とする」のが「知識人」とは本文に書かれていない。

(エ)の「名の知れわたった民間人」と「道義ある人」の比較はおかしい。また、公の言葉に「他人の評判を気にする」に該当する語句がない。さらに、「市井の人」は有名人(名の知れわたった民間人)ではない。その辺りの人という意味なのである。

(オ)は「ひとたび他人から期待されなくなると自暴自棄となつて」とあるが、これに該当する語句が公の言葉の中に見つからない上に、本文中の許の行動を「自暴自棄」とするのは無理がある。

また(カ)には「弁舌のすぐれた人間」とあるが、許は別に弁舌がすぐれていたわけではない。







会員番号	
------	--

氏名	
----	--